

地域愛を原動力に自ら行動し 課題解決に取り組む人材を育成

田布施農工高校 (山口・県立)

農業科と工業科をもつ田布施農工高校は、2019年、地域と共に人材育成を図る「田布施あい³(キュービック)プロジェクト」を立ち上げました。その特長的な推進方法と、それによる生徒の成長の様子をご紹介します。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

- 🔍 総合的な探究の時間
- 🔍 課題研究
- 🔍 学科・教科を越えて取り組む探究
- 🔍 地域コンソーシアム
- 🔍 生徒が推進する地域連携

持続可能な地域連携による 探究活動の充実を目指して

山口県南東部ののどかな町にある田布施農工高校。2010年に農業高校と工業高校の再編統合によって誕生し、農業系の生物生産科、食品科学科、都市緑地科、および工業系の機械制御科の4学科を設置する専門高校だ。23年度入試では同校生物生産科の志願倍率が県内トップの2.3倍、ほかの3学科もすべて全日制平均以上と勢いがある。

生徒の卒業後の進路は約4割が進学、約6割が就職で、地元に残る者も多い。人口減少によって農業や製造業の人手不足が深刻化する周辺地域からは、同校の人材育成に大きな期待が寄せられている。そこで、地域を支える人材を地域と共に育てようという考えで、同校は18年度にコミュニティスクールの仕組みを導入した。さらに19年度から3年間の文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(プロフェッショナル型)」を活用し、新たな地域協働カリキュラムづくりとして「田布施あい³(キュービック)プロジェクト」を立ち上げた。そのねらいについて、専門部長の松本純治先生はこう振り返る。

「それまでの地域連携は教員の属人的な取組も多く、転勤によって関係性が途切れてしまつケースが少なくありませんでした。また、地域の皆さんとの学びを、地域課題を解決する探究的な学びへと発展させることも課題でした。地域連携を一歩進め、持続可能な活動にするために、学校

を挙げての組織的な仕組みづくりが重要だったのです」

3つの「あい」を育む 3年間のプログラムを実践

同校の生徒について、教員は口を揃えて「素直で明るい」と話す。一方で、学習意欲や基礎学力の向上、異なる考えをもつ相手とのコミュニケーションには課題感もあるという。そうした生徒の実態を踏まえ、あい。プロジェクトでは「幅広い知識・技術」「創造力」「他者と協働して課題解決する力」を備える人材像の育成を目指している(図1)。

取組の軸となるのは、地域課題の解決だ。従来より主に3年次に専門科目の「課題研究」があるが、「どんな課題研究をしようか」と思っているうちに卒業になってしまい、活動を深めることが難しかった」と宗正いぶき先生。そこで、1年次から地域課題に触れ、段階的に活動を積み上げていく3年間のプログラムを構築したという。

各年次の活動には、「Eve」「I」「愛」という3つの「あい」がある(図2)。まず、「Eve(見る)」を掲げる1年次では、「産業基礎(総合的な探究の時間)においてさまざまな方法で地域を見て課題の発見を目指す。前半に他学科をローテーションして学習し、専門分野以外の多様な分野からも課題解決の手法を知り、学科を越えて連携して課題に取り組む視点を養うのがねらいだ。後半は、それぞれの学科に戻って、田布施町の魅力や課題、伝統・文化について、フィールドワークや



School Data

2010年設立／
 生物生産科・食品科学科・都市緑地科・機械制御科
 生徒数339人(男子166人・女子173人)
 進路状況(2023年3月卒業生)
 大学7人、短大4人、
 専門学校等35人、就職68人
 山口県熊毛郡田布施町大字波野10195番地
 TEL | 0820-52-2157

Outline

2010年度、田布施農業高校と田布施工業高校を再編・統合し、山口県唯一の農業科と工業科が併設された専門高校として開校。目指す学校像は「ものづくり学習を通して地域社会で活躍する将来の職業人を育成する学校」。2019年度に「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(プロフェッショナル型)」(文部科学省)指定校となり「田布施あい³プロジェクト」をスタート。



食品科学科
 宗正いぶき先生



生物生産科長
 津田洋平先生



専門部長
 松本純治先生

図1 育成する地域人材像

新たな時代を
 地域から支える
 人材の育成

- ① 地域産業の担い手として幅広い知識・技術を有する人材
- ② Society5.0時代に柔軟に対応できる創造力を有する人材
- ③ 世代を超えて他者と協働して課題を解決できる人材

図2 田布施あい³プロジェクトの概要

1年次「Eye」

地域を見て、
 課題を発見する

「産業基礎」

- ・学科横断型の実習
- ・専門的知識・技術の学習
- ・「田布施あいレポート」による地域理解
- ・RESAS(地域経済分析システム)を活用した分析

2年次「I」

地域の課題を
 自分ごととして
 考える

「総合実習」「課題研究」

- ・プロジェクト学習
- ・インターンシップ
- ・外部人材による講演
- ・地域と連携した活動
- ・成果発表会

3年次「愛」

地域を愛し、
 地域に貢献する

「課題研究」

- ・プロジェクト学習
- ・地域と連携した活動
- ・外部人材との意見交換
- ・小中学校との連携活動
- ・成果発表会

「宗正先生」
 教科横断的な取組の推進を目指す
 ない。プロジェクトには、普通教科も無関係
 ではない。数学科では地域に関するデータ

「宗正先生」
 教科横断的な取組の推進を目指す
 ない。プロジェクトには、普通教科も無関係
 ではない。数学科では地域に関するデータ

RESAS(地域経済分析システム)を
 活用して多面的に情報を収集して整理、
 分析する。
 「一(自分)」を掲げる2年次では、地域
 の課題の自分ごと化を目指す。「総合実
 習」や「課題研究」など各学科の専門教科
 において、生産者と地域農業の活性化の
 ためにできることを議論したり、地域の地
 質特性の調査結果に基づき防災について
 考察したり、地域課題に対する試行錯誤
 を行う。
 「愛」を掲げる3年次では、地域課題解
 決の学びを通じて地域と自分を愛するこ

とが目標だ。2年次までの学習より各自
 が専攻分野を絞り込み、班ごとに地域と
 協働で課題研究に取り組む。例えば、特
 産品である自然薯の栽培を通じて行う
 管理の仕方などの調査・研究、公共施設へ
 の花壇設置の提案と施工など、地域を舞
 台にさまざまな活動を行っている。
**大きく前進した
 農業と工業のコラボレーション**
 あい。プロジェクト実施体制の特長の
 一つは、学科や教科を越えて学校全体で
 取り組んでいることだ。

「松本先生」
 また、生徒もすでに学科の壁を乗り越
 えていった。1年次で学科ローテーショ
 ンを始めたことで、その経験をヒントに自
 分たちの活動に他学科の技術を役立てる
 アイデアを出すようになったのだ。例えば、
 生物生産科は堆肥を作る際、そこで必要
 となるセンサーを機械制御科に製作依頼。
 また、食品科学科のレシピ開発では生物
 生産科が作った野菜を提供してもらった。
 「生徒自らが他学科の教員に協力を要
 請して実現したこともたくさんあります。
 そうして関わった先生はその後にも気にか
 けて「どうだった?」「何かできることあ
 る?」と声を掛けてくださり、学科を越え
 たコミュニケーションにつながっています」



都市緑地科3年生が田布施町のPRをテーマに地域交流館前にケーキをイメージする花壇をデザインし設置。生物生産科の苗、機械制御科が企業と共同制作したオブジェを使用。



食品科学科が子ども食堂とコラボして「農工弁当」の製作に挑戦中。食堂経営者のアドバイスを受けながら、ターゲットの絞り込み、原価率計算、レシピ検討などを行った。

の活用、英語科では、地域の紹介を英語でプレゼンテーションをするなど、多くの普通教科で地域を題材にした授業を行っている。なかには普通教科の教員が課題研究に入っている例もある。生物生産科長の津田洋平先生は、こう手応えを感じているという。

「今は先生方が日常的に『一緒に何かしませんか』と声を掛け合い、学科や教科が変わりながらいろいろなことを行っています。昼食会を開く必要もなくなりました」

大人の議論にも参加する「生徒あい。委員会」

あい。プロジェクト実施体制のもう一つの特長は、「生徒あい。委員会」だ。これは生徒がより主体的に地域に関わってい

くため、あい。プロジェクト開始2年目に設置したもので、毎年、全学年の各クラスからメンバーを募って活動している。

その主な役割は、あい。プロジェクトを通じて地域と学校をつなぐことと、生徒同士をつなぐことだ(図3)。コンソーシアム会議で同校の活動について報告や相談を行うほか、地域からの要請に応じて街づくり会議などで地域の大人たちと議論することもある。また、毎月、各学科の日常的な活動風景を動画にして正面玄関のモニターで放送するなどし、生徒や教員、外部からの来校者が各学科の学びを知る機会をつくっている。

「年度始めの委員会立ち上がり時のメンバーのモチベーションはさまざまですが、本気で取り組む生徒の影響を受けて全体の意識が高まっています。なかには人見知りでも人前に出て話すことに苦労する生徒に対して自信をもって意見を言えるようになっていきます」(宗正先生)

コンソーシアムを核に生徒が広げる地域協働

地域との連携は、あい。プロジェクト開始に際して設置したコンソーシアムを核として推進している。コンソーシアムは町内の農業・工業関係の事業所や団体などの地域の16人で構成。年3回、同校の活動や授業改善について議論を交わし、連携先への橋渡しや生徒への指導などの協力を得ている。

発足初年度のコンソーシアム会議は、主

図3 生徒あい。委員会の活動予定

- 正面玄関用の動画作成(月1回更新予定)
- 中学生向けの学校パンフレット作成など
- コンソーシアム会議への出席
(年3回/5・6時間目の授業時などを使用)
- 発表・取材(地域からの依頼があった際に実施)
- 田布施View会議(年2回)
※生徒・行政・地域住民が集い、街づくりを議論
- 定例会(月1回ほど。昼休みに実施)

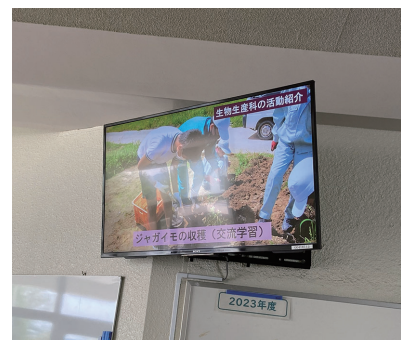
に教員からの報告に対して委員から意見をもらうものだった。それが、2年目から生徒あい。委員会も参加するようになる。会議の雰囲気が大きく変わっていった。

「まず、委員の方々も生徒にもわかるように話そうとされることで、自然と堅苦しさはなくなりました。そして、生徒が自分たちの活動内容をプレゼンし、助言を頂いたり、ご協力をお願いしたりするなかで、『みんなで一緒にやろう』という空気が醸成されていったように思います。会議後も生徒とコンソーシアムの方が『この前はありがとございました』『あの活動どうなった?』などと語り合う姿が見られ、生徒が地域とのつながりを強めてくれています」(松本先生)

生徒が地域に出て活動する様子が学



田布施View会議で、コンソーシアム委員や地域住民と田布施町総合計画についてディスカッション。

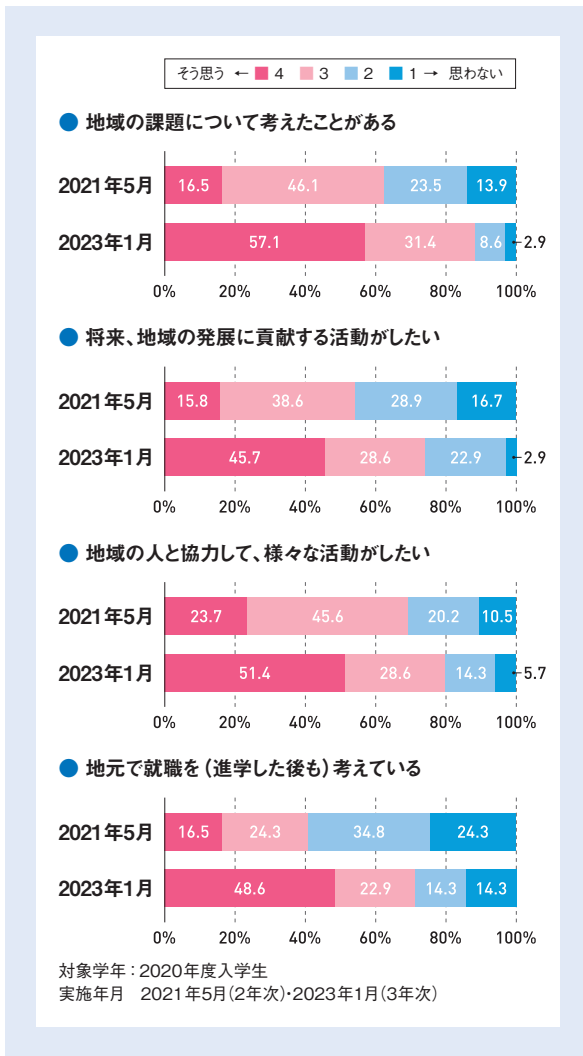


毎月、学科の取組紹介動画を作成し、正面玄関のモニターで放送。

校のWebサイトなどを通じて地域に知られてくると、地域側から「一緒にこんな取組ができないか」といった相談が入るようになった。現在はコンソーシアムを介さない連携も多数生まれ、幅広い授業で地域連携の取組が行われるようになった。例えば食品科学科では、1学期だけでも約10カ所の事業所などさまざまな連携をした授業を行っている。

「野菜作りなど1年間で完結しない取組もありますが、後輩に引き継いで積み重ねていく流れもできてきました。当初目指

図4 生徒(2020年度入学生)アンケート結果の一部



した、教員の担当者が変わっても活動が切れない体制にもなってきたと思います(津田先生)

文科省の事業は21年度で終了したが、その後もあい。プロジェクトは発展しながら継続している。

地域との協働でスイッチ 主体的に行動する人へ

では、こうした活発な地域協働による3年間の学びのなかで、生徒はどう変化しているだろうか。

まず、あい。プロジェクトの目標の一つである「地域に対する愛」が着実に育っていることが、データや教員の話からうかがえる。生徒アンケート結果の経年変化を見ると、年次が進むにつれて地域課題への関心や地域への貢献意欲が大きく増加し

ている(図4)。

「いろんな場面で、生徒の『自分が地域のために何かするんだ』という意識込みを感じます。田布施町外在住の生徒も多いですが、それぞれの地元を見つめ直す機会になり、地元が単に『家がある場所』であるだけでなく、『自分たちが生きている場所』との思いが強くなっているのではないのでしょうか(松本先生)

こうした地域愛を原動力に活動するなかで、生徒は多様な力をつけていくという。「自分たちの活動を地域の方に認めていただくことで自己肯定感が高まった」「連携先企業の経営状況にも影響する活動に取り組むことで責任感が芽生えた」など、教員からはさまざまな手応えが語られる。

また、素直だが受け身な面もあった生徒たちが、やりたいことに向けて自ら突き

Interview

人とつながる力を伸ばしていきたい

畜産や野菜作りなどの作業は、決して1人でできません。生物生産科のさまざまな活動のなかで、周りの人とどう協力するかを考え、声を掛け合い、助け合うことを学びました。また、地域の方と連携して行う活動も多く、先輩たちが築いた関係性を基に、新たなつながりも切り拓いていこうとしています。生徒あい³委員会でコンソーシアムの方と話し合うときは内心ドキドキですが、皆さん優しく話しやすい雰囲気をつくってくださるのがありがたいです。こうして人と出会い交流するのがとても楽しく、もっといろんな人とつながって多くのことを知りたいと思うようになりました。高校卒業後は大学に進学して心理学を学び、コミュニケーションの力をつけることが今の目標です。

(生物生産科3年生・井上 昌さん/写真右)

ものづくりの責任感や、地域の一員である意識が芽生えた

ジャムやお酒などを地域と連携して製造・販売する実習を通じて、「生産者」としての責任感を味わうことができました。例えば、ジャム製造時に異物の混入は絶対避けなければなりません。大変だけど、商品喜んでくださる方を思い浮かべてがんばっています。将来は、地元で食品の商品開発に携わる仕事に就きたいと考えています。

いろんな授業で地域の方と関われることはすごく楽しいです。生徒あい³委員会として参加した田布施町の会議で、「生徒が作った野菜やジャムを車で販売してはどうか」とご提案いただいたとき、「ああ自分たちはすごく頼りにされているんだ」と実感しました。私の住む町でも何かできることがあるかもしれません。今後も地域に積極的に携わる姿勢を大事にしていきたいです。

(食品科学科3年生・山根 輝さん/写真左)



進む姿も見られる。

「1年生のときは与えられたテーマをとりあえずこなしてみることから始まりますが、自分たちの活動が地域の方に認められたとき、スイッチが入ります。『先生どうするの?』『次は何するの?』と指示を待っていた生徒たちが、『生物生産科の野菜を使いたいので畑に行つて交渉してきていいですか』と自ら必要な大人にアクセスしたり、『明日こういうことをしたいから準備をお願いします』と要望を出したり、やりたいことに向けて自分で切り拓いていくようになっていきます(宗正先生)

卒業後は、同校で育んだ力を地域で発揮していくことが期待される。

「何か大きなことをしなくても、地域の子どもたちに『いつかっしょい』『おかえり』と言葉を掛けられるような、地域を愛する大人になってほしい。それが地域の力になり、地域の農業や工業を盛り上げていくてくれると思います(津田先生)

また、地域愛とともに学校愛も育んだ卒業生が、再び同校の下に集まってくる日を、教員一同で楽しみにしているという。

「ある卒業生は『いつか学校協議会メンバーとして戻ってきます』と言って単立してきました。地域愛や学校愛をもつ卒業生と共に『チーム田布施』となり、今後も地域を担う子どもたちを育てていけたら嬉しいですね(松本先生)